

こども委員会のよりみちコラム

今回の担当：村松 海輝

書いた日：2025年2月1日

皆様、こんにちは。寒さが増しておりますが、お子さんたちとお会いすると汗だくになるため、まだ半袖で仕事をしている岩手県立療育センターの村松です。2月のコラムは私が担当します。私からは今年度に行いました岩手県作業療法士会助成金制度を用いて開催した発達領域における研修会についてと発達領域の作業療法が抱える問題についての2点を報告させていただきます。

まずは研修会についてのご報告です。令和6年9月21日に実際にお子さんに対するセラピーを行い、翌日には臨床場面の動画を用いた講義やグループワークを行いました。講師にはHON@ASI、代表小松則登氏（公的所属：愛知県医療療育総合センター中央病院）をお招きしました。岩手県内や東北そして関東から作業療法士、理学療法士および言語聴覚士の先生方が約30名参加しました。「作業療法とは何か」「問いを立てながらお子さんに向き合うこと」など日々の臨床だけでは学ぶことができない気づきが沢山得られる貴重な機会になりました。また、実際のセラピー場面「お子さんはセラピーで変わることを目の当たりにして、自身の臨床を見つめ直す機会になりました。

続いて発達領域の作業療法が抱える問題（特に岩手）です。近年、発達領域における作業療法士に対する需要は高まっており、急激に働き方が変化しています。岩手県内でも医療・福祉・行政・教育・コンサルタント…など様々な場所で作業療法士が子どもに関わっています。発達領域の長年の課題は横のつながりがなく、どこで作業療法士が働いているか、どんな方が関わっているかが見えないことです。そして作業療法士としてお子さんに関わると「〇〇先生」と呼ばれることが多いです。そのためか、本来ならば保護者様や支援者様（それぞれのライフステージで関わって下さっている方々）があつてのお子さんであるにも拘わらず、大先生のような雰囲気でお話している方をよく目にします…。確かにお子さん・保護者様・支援者様にとっては目の前にいる作業療法士がこどものリハビリテーションの専門家と判断されます。だからこそ、提供したモノやコトバには責任があり、教科書に書いていることを専門家風に話すのではなく、一人一人に向き合う姿勢、そして向き合った結果から専門用語ではなく、誰にでも伝わる言葉でお伝えすることが重要だと思います。お子さんや保護者様の長い人生にとって作業療法士として関わりは一瞬です。そして作業療法を行ったとしても発達障害を治すことはできず、1回の関わりで劇的な変化がみられるだけではなく、作業療法士としての関わりだけでお子さんは変わるわけではない。しかし、目の前にいるお子さんたち一人一人に丁寧に関わっていくことは何らかのきっかけや何らかの影響を与える可能性は十分にあると思います。どんな場所でお子さんたちに関わっていても目の前にいるお子さんにとってはたった一人の作業療法士であり、経験年数や立場など関係ないです。主役はお子さんであることをいま一度考えながら今後もヨコナラビの関係で切磋琢磨していきましょう！！

